

1-P4-18 中高年心身障害者に対するリハビリテーションの現状

重症心身障害児(者)施設「すくよか」リハビリテーション科
高橋 洋

【目的】心身障害児のリハは療育分野等で行われる一方で40歳以上の中高年知的障害者が骨折・脳血管疾患・老化等に伴う身体障害を併発し、中高年心身障害者となった時のリハに関する報告は少ない。今回、当施設にて経験した中高年心身障害者へのリハの現状を報告する。【概要】スタッフは医師、PT、OT各1名。施設は重症心身障害児(者)施設が98名、併設の知的障害者更正・授産施設に592名。1日平均の訓練者数は重心17.4名、他2.2名。疾患は廃用が最多、次いで骨折。実施別は障害児(者)79.8%、運動器(1)が15.1%。知的程度は4~5歳レベルが中心。【課題と取組】課題は1.本人の治療やリハへの理解不良があり、一般病院から術後すぐやリハ途中で退院させられてしまう。2.独自の癖が完成されていて矯正が困難。3.シミュレーションや言語指導が困難。取組としては1.具体的に楽しい短期と中長期の目標をわかりやすく設定。2.食事・ゲーム等で座位・歩行姿勢を微調整し安楽を体感した上で、癖を少しずつ補正していく。3.医療と生活が一体化している施設の特長を生かし、食事・更衣の時等に出張リハを行った。【結果等】骨折者は手押し車等を含め約87%で独歩可能、全体でも座位保持100%等の成果が得られた。またリハにて発達を促され、歩行が訓練前より安定するケースもあった。今後の課題としては、1.訓練開始前後、気分の調整に20分かかるため、療法士の受持が通常の半分。2.自主リハが不可能で維持期リハの必要があるが人的に不足している。3.障害児(者)リハの手数に対し点数が低い事があげられる。